

13. てんかんの局所脳血流検査

清水 勅君 星 博昭 大西 隆
 長町 茂樹 陣之内正史 渡邊 克司
 (宮崎医大・放)

てんかんの焦点は通常脳波や臨床症状などによって決定されることが多く、X線CTやMRIなどの画像による診断は困難である。しかし、脳波では深部に病巣が存在する場合、その焦点を正確に検出する率は低いと言われている。

今回われわれはてんかん患者 20 例を対象に IMP-SPECT を施行し臨床症状や脳波などと比較検討を行った。IMP 陽性率は部分発作が 92% 全般発作が 63% で、陽性の症例では 1 例平均約 3 か所に集積異常を認めた。なお集積異常はいずれも低集積、すなわち脳血流の低下であった。臨床症状との比較では一致例が 9 例、不一致が 3 例でこの 3 症例はいずれも側頭葉てんかんであった。脳波との比較では脳波の陽性率 55% に対し IMP は 80% と高率で、20 症例中に IMP が陰性で脳波陽性の症例は 1 例も認めなかった。

14. Crossed Cerebellar Diaschisis 様所見を呈した後交通動脈瘤の 1 症例

伊豆永浩志 富口 静二 仏坂 博正
 原 正史 坂本 祐二 古嶋 昭博
 高橋 睦正 (熊本大・放)
 諸木 浩一 永広 信二 生塩 之敬
 (同・脳外)

今回われわれは、後交通動脈瘤による大脳脚部の圧排により対側小脳の血流低下をきたしたと思われる症例を経験したので報告する。

症例は 35 歳女性で、右上下肢の筋力低下を主訴として近医を受診し、CT, MRI より脳動脈瘤を疑われて、本院脳外科入院となった。MRI 上動脈瘤による中脳の左前方よりの圧排が認められ、血管造影で左後交通動脈に巨大動脈瘤が証明された。 ^{123}I -IMP による SPECT 上、右小脳に半球血流の低下が認められ、皮質橋路の圧排による伝導路の抑制が原因かと考えられた。

15. 悪性黒色腫の ^{123}I -IMP シンチグラフィ

新野 順 木下 博史 林 邦昭
 (長崎大・放)
 廣瀬 寮二 (同・皮膚)

われわれは、最近 2 年 4 か月間に、悪性黒色腫の患者 18 例に、IMP, およびガリウムシンチグラフィを施行した。平均年齢は 63 歳。原発巣は、IMP で 4/9, ガリウムで 1/11 が陽性であった。また 4 例に転移巣が発見され、こちらは IMP で 3/4, ガリウムで 3/3 が陽性であった。

本症では、転移巣の早期検出が、シンチグラフィに期待される。IMP とガリウムを比べると、われわれの症例では、いずれが勝るか症例により一定しておらず、一方、生理的集積と重なった部位は、IMP, ガリウムとも弱点と言えた。ガリウムシンチとあわせ、IMP シンチは、術後、積極的に行っていくべき検査であると考えた。

16. ^{123}I -IMP 経直腸投与方法によるラットの門脈循環の検討

隈部 力 森田誠一郎 石橋 正敏
 野村 保史 船津 和宏 平山 貴紳
 吉居 俊朗 高橋 一之 大竹 久
 (久留米大・放)
 梅崎 典良 (同・RI 施設)

^{123}I -IMP は、脳以外に、肺、肝臓でも捕捉されることより、経直腸投与方法による門脈シンチグラフィが可能である。今回、ラットを用いて、経直腸投与方法による下腸間膜静脈経由の門脈循環の検討を行った。対象は正常ラットおよび門脈結紮モデルである。実験の結果、門脈結紮群では、正常群に比して、結紮の程度により肝臓での捕捉が減少し、直腸から減少したカウントと肝臓カウントより求めたシャント率に差が認められた。